

## 第30回大会記念講演

### 「ヘミングウェイとサンティアゴ巡礼の旅」

今村 楯夫 日本ヘミングウェイ協会顧問

私がサンティアゴに出会ったのは高校1年生、16歳の時でした。いや、その時には気づいていませんでした。後になって『日はまた昇る』の主人公のジェイク（ジェイコブ）が聖ヤコブに由来した名前だということを知り、また『老人と海』の主人公サンティアゴも聖ヤコブに由来した名前だと知りました。すなわち、ヘミングウェイの最初の小説と最後に書かれた小説の主人公が実は同じ名前だと気づいたのはずっと後のことです。

ヘミングウェイがこだわった「サンティアゴ」の歩いた道はキリスト教徒にとって巡礼の道であり、その最終地はサンティアゴ・デ・コンポステーラです。いつの日か、この巡礼の道を歩いてみたいと思っていましたが、ついにその道の最終目的地に近い町サリアから約110キロを歩くことができました。1000キロを歩く人からすれば、ほんの短い巡礼の旅ですが、自分なりに満たされた思いと達成感がありました。その旅の報告と共に『日はまた昇る』の世界を重ねて探索します。

研究発表（1）

NG LAY SION（麗澤大学）

#### **“His eyes...they were the same color as the sea”: Ecology of Color and the Anti-(Environmental) Imperial Perspective in *The Old Man and the Sea***

Ecocritical scholars have widely investigated the theme of interdependence and individualism in *The Old Man and the Sea*. Gregory Stephens and Janice Cools, for instance, argue that “Hemingway articulated an ethic of heroic humanity” through his foregrounding of Santiago’s interdependent relationship with Manolin, the feminine sea, and nonhuman animals in the novel. However, Glen Love views Santiago’s killing of the great fish as a non-heroic act that shows Hemingway’s anthropocentric worldview. Clinton S. Burhans Jr. suggests that while it is Santiago’s egoistic individualism that encourages him to kill the great marlin, his killing of the marlin ultimately leads the old man to realize the importance of interdependence. Drawing on these insights, this paper attempts to expand the theme of interdependence and individualism through the lens of the ecology of color, color symbolism and non-anthropocentrism.

In this presentation, the presenter first analyzes the novel through adopting Heather I. Sullivan’s ecological posthumanist perspective on Johann Wolfgang von Goethe’s material optics and Karan Barad’s posthumanist approach called “intra-action.” Here, the presenter argues that Santiago’s colorful descriptions of his material surroundings in the novel indicate that color is *all*

*around, through, and in* both human and nonhuman entities. In the next section, drawing on the theory of color symbolism, the presenter suggests that the dualistic qualities of the blue sea—which symbolizes the African goddess called Ochún—play an important role in shaping Santiago’s conflicting mind and body in the novel. Following this, the presenter demonstrates Santiago’s struggle between his ecological sense and his egotism through analyzing the significance of his cramped left hand and functioning right hand. Here, the presenter uncovers the parallel symbolic power structure embedded in the fish-hunting episode (Santiago versus the great fish) and the arm-wresting scene (Santiago versus the great negro), suggesting that the imperial fisherman Santiago and the functioning right hand speak for eurocentrism, anthropocentrism and individualism, whereas the great negro, the marlin and the cramped left hand call attention to the opposite viewpoints. This brings up the question whether it is the former or the latter mindset that the old man holds on to at the end of the story.

In the presenter’s viewpoint, the ironic ending of the novel seems to support the latter perspective. Santiago’s feeling of guilt for killing the marlin followed by the devouring of the marlin by groups of sharks indicates an eco-philosophy whereby a disrupter of the natural balance of nature receives retribution from the law of nature. Furthermore, Santiago’s referring to himself as a “slave” suggests a reversed power relationship between himself and the marlin which points to the notion of “white guilt,” a shared moral responsibility derived from colonial behavior toward people of color. Santiago’s realization of being “too far out” to sea at the end thus serves as a representation of a collective guilt endorsed by European imperialists towards others, including people of color, animals and the natural world. From the feminist ecocritical viewpoint, Santiago’s shifting toward a non-anthropocentric mentality at the end thus indicates that it is interdependence and anti-imperialism that Hemingway attempts to stress among other perspectives.

研究発表（2）

瀬名波栄潤（北海道大学）

### 偽装するクレブス：クローゼットの中と外の故郷

*In Our Time*（1925年）の「兵士の故郷（“Soldier’s Home”）」（1924年作）は、主人公ハロルド・クレブスが自らのホモセクシュアリティを偽装する物語だ。本作品については、ヘミングウェイ自身の言葉“the best story I ever wrote”に誘発されたかのように、多くの批評家が嘘をテーマ軸に、作家の個人的経験や戦争及び故郷の実態を断片的に比較し検証してきた。しかしながら、この作品の最大の嘘は、クレブスの性的指向が氷山の下にずっと潜伏させられたままであることなのだ。

ゲイはクローゼットに幽閉される。事実、不思議なことに、クレブスの同性愛指向をアウトティングする本格的な研究はこれまで極めて稀だった。Paul Smith の批評史 (1989) を見ても、DeFalco (1963)、Baker (1969、1988)、Boyd (1981)、Nagel (1984)、Reynold (1986) などの考察のどこにもクレブスの性的指向への言及はない。ヘミングウェイ作品のジェンダー・セクシュアリティ研究専門家である Mellow (1992)、Comley & Schole (1994)、Moddelmog (1999、2013) そして Strychacz (2003) も、クレブスの偽装に協力するかのよう、彼のホモセクシュアリティには論及していない。クレブスのセクシュアリティは公然の秘密なのだろうか。他方、Donnel (2002) は、軍隊生活がクレブスを異性愛者から同性愛者へと転換させたという環境決定論を唱えるが、性的指向の本質について論拠がなくおぼつかない。

クレブスは、自らの生得的同性愛指向を隠蔽するために人生を捧げてきた。彼の学歴、戦争、故郷といった外の世界は全て、自らをクローゼットの中に留めるために変容する。例えば、作品中で言及される2枚の写真。1枚目では、クレブスはカンザスのメソジスト・カレッジの *fraternity* 仲間とともに写っており、敬虔なクリスチャンだと思われる傾向がある。が、当時の *fraternity* が、Greek をその起源とするように、同性愛者の秘密の社交場だったこと (Carroll、2003) には注目されていない。2枚目の写真では、背景となるべきライン川はなく、クレブスと伍長の男性二人にドイツ人女性二人が並んで撮られている。この不自然な異性愛世界は強引に演出されたものであり、ホモフィリアとミソジニーの偽りの同居であることにも気づかれていない。故郷では、男性用トイレの中はクレブスにとって親密な場だが、家の外を通る若い女性とは距離を置く緊張関係にある点も不可解。露骨なのは、異性婚への拒否反応だ。そして、当時の性的少数者が故郷を捨て都市へと逃亡したように、クレブスも同じ選択をする。まるで、自らの性的指向を隠し続けることがクローゼットの中でも外でも複雑すぎると悟ったかのようだ。カミングアウトしない多くの性的少数者たちは、嘘にまみれた人生を送るという。本発表では、クイア論の観点から、自虐的に偽装するクレブスを暴く。「兵士の故郷」がヘミングウェイにとって“the best story”なのは、ホモフォビアを自認する作家が、自己否定を繰り返す主人公の性をクローゼットに閉じ込め、自らの故郷にはもう二度と戻れない姿を一貫して包み隠すことに成功したと思ったからかもしれない。

## ヘミングウェイと法

「ちゃんとしないこと」—ヘミングウェイ作品における、非合法的な結婚の示すもの  
千代田夏夫（鹿児島大学）

ヘミングウェイ作品においては、男女の異性愛主義的ラブ・ロマンスの典型的な結実たるべき〈結婚〉が「ちゃんとしていない」ことがしばしば見られる。作中男性主人公や周囲の人間によって否定的に指摘されるそのイレギュラリティは、公的手続きの欠落によるものである。欠落の原因は、外国の法律に則ることの煩雑さゆえの回避（『武器よさらば』）や適切な権限保持者を欠いたままでの結婚の宣言（『誰がために鐘は鳴る』『エデンの園』）など、多岐にわたる。本発表では『武器よさらば』（*A Farewell to Arms*, 1929）『誰がために鐘は鳴る』（*For Whom the Bell Tolls*, 1940）『エデンの園』（*The Garden of Eden*, 1936）そして未完の「最後の理想郷」（“The Last Good Country”）を主なテキストに、ヘミングウェイ作品における、法的見地からの結婚の非標準性—思い切ってしまうならば非合法性—に焦点を当てる。キリスト教的社会において（合法的）結婚とは、教会という前近代から連綿と続く（法的）権威と近代の実定法とが交錯する現場である。狩猟法を侵したニック、妹リトレスの逃避行とそれを追う監視官を描く「最後の理想郷」の作中、兄との結婚を願ってリトレスが依拠しようとする「書かれざる法」—この語は「アメリカのイヴ」ことイヴリン・ネズビットを巡る、富豪ハリー・ケンダル・ソーによる建築家スタンフォード・ホワイト殺害（1906年）とその「世紀の裁判」を通して二十世紀初頭の米国社会に広まった—は、リサ・アピニャネシも指摘するように、実定法に優越するコード・オブ・オナーとして一種の前近代性を召喚するものでもあった。作家の生きた時代に、離婚の可能性を前提に子供を持たない友愛結婚の出現など、結婚のかたちはさまざまに変容していたことは言を俟たないが、本発表ではヘミングウェイ作品の〈結婚〉において侵犯され続ける〈法〉の意義を問いながら、あらためて「ヘミングウェイ・ヒーロー」「コード・ヒーロー」の何たるかもまた、考察できればと思う。

### ヘミングウェイ文学における契約

辻秀雄（首都大学東京）

ヘミングウェイのより詳細な書簡集が順次刊行されているところだが、それらに目を通してつくづく感じるのが、金にまつわる話題に事欠かないことだ。例えばスクリブナーの担当編集者マクスウェル・パーキンスとのやりとりにもこれが顕著で、そこにはまさしく実社会に生きる「生身のヘミングウェイ」が現れている。作家といえども霞を食べて生きているわけではなく、またヘミングウェイについて言えば、度重なる離婚で生じた養育費の支払い義務といった切迫した金銭事情もからんでくるのである。ただ、ヘミングウェイのお金の稼ぎ方というのはかなり特殊なかたちであったのもまた事実だ。賃金や給与による安定した収入が約束されるわけではないものの、しかし作家生活が軌道にのってからは前金をえて執筆を進め、作品が当たれば巨額の執筆料や印税が転がりこむ。一般の職業人からしてみれば別次

元の生活だが、それでもその背後には同時代的な政治経済的な条件付けがあったのではないかというところに着目したい。より具体的には、20世紀転換期の政治経済上の転回がアメリカにおける個人主体のありかたに及ぼした影響を詳細に論じたジェイムズ・リヴィングストンの仕事 (*Pragmatism and the Political Economy of Cultural Revolution, 1850-1940*) を参照しながら、「ヘミングウェイと法」というテーマにあわせて、ヘミングウェイ自身にまつわる、あるいはヘミングウェイ文学にあらわれる契約について検討していきたい。

厳密に言えば契約は法律によって定められた一定の形式を備えた文章によって交わされるのであろうし、ヘミングウェイ自身も様々なフォーマルな契約を交わしたのだろうが、例えば手紙のやりとりでの口約束のようなものでも「法」とほぼ同等の効力を持ったはずだ。すなわち契約とは、法律文章としての形式を備えていなくとも、例えば義務や責任といったもう少し曖昧な次元における「法」的効力をもって個人を規定していくのである。その意味において、契約を少しゆるやかにとらえながらそれがヘミングウェイ自身、あるいはヘミングウェイ文学に現れる登場人物にいかなる影響を及ぼし、そして彼ら彼女らがその影響下においていかように主体として行動していくかを検証することで、個人とそれが生きる社会における政治経済的条件付けとの関係を考える糸口がえられるように思われるのである。

発表では「敗れざる者」、「五万ドル」、『持つと持たぬと』、『誰がために鐘は鳴る』などを扱う予定である。

### ヘミングウェイ作品の狩りと釣りにおける法的（無）意識

高村峰生（関西学院大学）

Michael Reynolds による伝記 *The Young Hemingway*(1986)によれば、1915年7月にアーネスト・ヘミングウェイは北ミシガンのウォルーン湖でサギを撃ち、その獲物を所持したまま妹とボートに乗っていたところ、森の管理者に違法ではないかと咎められたことがある。慌てたヘミングウェイは、すでに死んでいたサギをもらったのだと咄嗟に嘘をついた。この事は、母親の Grace の介入もあり、法的な問題には発展しなかったが、Reynolds はヘミングウェイ家においては宗教的な戒律の方が狩猟に関わる実定法よりも重要視されていたと述べている。父クラレンスは動物や鳥は狩猟されるべくこの世に存在すると考えていたし、息子のアーネストもその考えに影響を受けていたのだ。この出来事は、ヘミングウェイの作品における狩り（あるいは釣り）の場面における法意識の在り方に影響を及ぼすようになったかもしれない。

本発表では、ヘミングウェイの二つの短編作品 “Out of Season” (1923) と “The Short Happy Life of Francis Macomber” (1936) における釣りや狩りの場面に注目し、そこにおいて法的なものがどのように両作品における主人公とその妻の行動に影響を与えているかを考察したい。この考察を通じて、狩り＝釣りという自然を相手にしたときの「掟」と、その行動を規制する「法」の両者の緊張関係が浮かび上がるだろう。狩りや釣りをする人物は自然の掟と人間に定められた法の両者を意識しながら行動しており、時には法を犯すことは勇気ある行動となる。また、これらの短編が外国を舞台にしており、外国語が頻繁に描かれていることにも注意を払いたい。法や掟は時に普遍的であり、時に言語特殊的であって、外国語が話される環境において法的なものが実際にどのように運営されているかは、主体にとって不可

知なものとして現れる。“Out of Season”においてはまだ萌芽期であったイタリアン・ファシズムが、“Francis Macomber”においてはアフリカの植民地状況が、それらの地域の特異な法環境を形成しており、主人公たちは何が違法であるかだけでなく、何の違法が違法として認識され、どのように裁かれるのかといったことも曖昧な、極めて不安な状況に置かれる。こうした法の不可知性については、（時間が許せば）カフカの法や掟をめぐる作品や、自然法の下における必要なる暴力と法的なものの執行としての暴力を区別したヴァルター・ベンヤミンの「暴力批判論」なども参照しつつ、論じてみたい。

### ヘミングウェイの「遵法」精神

新田啓子（立教大学）

『コモン・ロー』（*The Common Law*, 1881）においてオリバー・ウェンデル・ホームズ・ジュニアは、「法の生命は論理ではなく経験である」と説いている。それがつまり、慣習の規範化に基づくコモン・ローの謂なのであるが、その上で彼は、個々の争議を解決し、正義や秩序、均衡をもたらすために執行される法なるものの根源は、「復讐の情熱」であるという。なるほど、規範を侵した者に課せられる賠償や刑罰の本質が復讐だという説明は、非常に納得いくものである。しかもこれは、極めて文学的な発想であるともいえるのではないだろうか。判事・法理論家として名高い Richard A. Posner も、この点に注目しつつ「法と文学」の関係を模索している。

ただし、文学が法に介入する時、おそらくより鮮明に現れるのは、法の権力、つまり、正統な法手続き以外の「復讐」を禁じる、規範の強制力への抵抗のほうなのではなかろうか。例えば報復や自衛のためとはいえ、恣意的にふるわれる私的な権力（暴力）は、往々にして許されない。だがそうした場合、恣意的なのは、法外な個人なのか、法なのか。我々がほぼ日常茶飯事に遭遇するこの問いは、法に否認され文学に流入し、遵法の原則が一概に倫理へは逢着しないさまを描く。そして、ことヘミングウェイという作家にあっては、法の外にある生の道理を見通す意図の感じられる作品を、数多残しているわけである。

この作家は基本的に、法や規律、規範の作用に敏感な人物であったのだろう。「医師とその妻」（“The Doctor and the Doctor’s Wife”）では、ニックの父の「盗木」の疑義がインディアンにより発せられ、「ボクサー」（“The Battler”）は、貨物列車への不法乗車を試みたニックが、制裁を喰う場面で幕を開ける。『武器よさらば』（*A Farewell to Arms*）のヘンリーが、憲兵に追われる脱走兵であるかと思えば、「蝶々と戦車」（“The Butterfly and the Tank”）では迷惑罪に見えた行為が、思わぬ悲劇の顛末を生む。いわばこうした「違反」が導く多様な結果が、物語に個性と強度をもたらしている。さらに興味深いのは、『持つと持たぬと』（*To Have and Have Not*）のハリーのように、冷静に見れば反社会的勢力と呼ぶしかない人物の粗暴な所業である。この所謂ヒーローは、法という枠組みのなかでは、いかに解釈可能なのか。本発表では、以上の諸作品のほか、『午後の死』（*Death in the Afternoon*）が綴る闘牛の美学を補助線に、法律の理屈には則っていないヘミングウェイの遵法精神と抵抗の構造の一端を探ることを試みる。